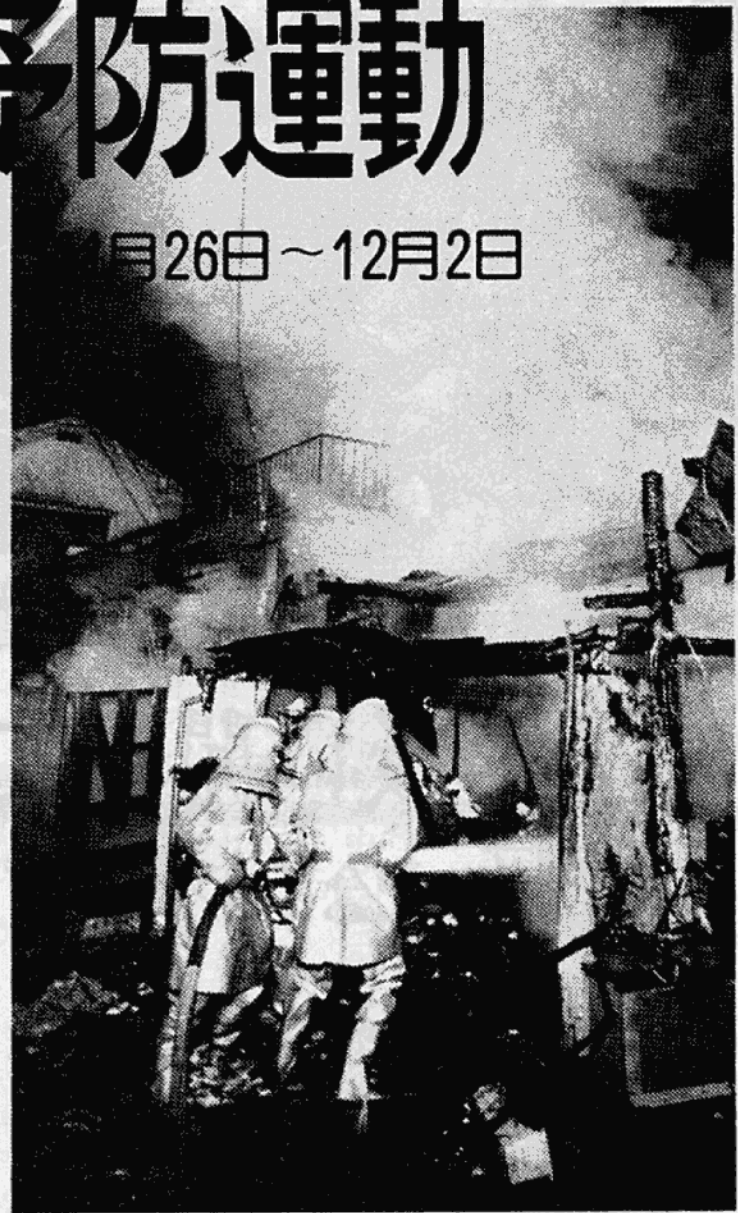


# 秋の全国火災予防運動

11月26日～12月2日



十一月から三月にかけての冬場は、石油ストーブなどの暖房器具を使うことから、一年のうちでも最も火事の多い季節です。火災の原因をみますと、暖房器具の中で一番多いのは、なんといっても石油ストーブです。昭和五十三年の統計では、ストーブによる火災二千七百六十六件(全国)のうち、七五%にあたる二千七十六件が石油ストーブによるものです。今年も、十一月二十六日から十二月二日まで、秋の全国火災予防運動が繰り広げられます。石油ストーブの安全な取り扱い方と火を消すための「三つの基本」について考えてみました。

## 仲たがいで火は消える

### 火の3要素



燃えうつれない

燃えるものを取り除く  
除去消火

火が出る——ものが燃えるためには「燃えるもの」と「空気(酸素)」と「熱」が必要です。これは、いわば「火の三要素」といえます。

これくらいと  
思う油断を  
火がねらう!

ます。このうち、どれか一つでも欠けると、物は燃えません。つまり火を消すということは、この「燃える三要素」のどれか一つを取り除く、あるいは、しゃ断してやればよいということです。

私たちは、ふだん家庭の台所などで、毎日火をつけたり消したりしています。このような「点火」と「消火」の仕組みは、別の言い方をすれば、燃える三要素を組み合わせた「仲たがい」させたりしていることになるのです。消火のコツもここにあります。

消火の方法は、この燃える三要素に見合った三つの形が考えられます。つまり、三要素のどれか一つを初期の段階で「仲たがい」させるのです。

切って延焼を防ぐ場合などがあります。

空気(酸素)を断つ  
窒息消火

天ぷらをあげていて電話がかかり、うっかり長話になって戻ってみると、なべに火がはいっている。こんなときとつさに、なべにフタをすると酸素が断たれ、火は消えます。

また、倒れた石油ストーブが燃えだしたときは、シートなどを水にぬらしてかぶせると消すことが



## 菅笠日限地蔵尊と文豪連理塚

表紙のことは

史跡の多い匠町の浄光寺には、前回紹介した、お首だけの「含満親地蔵」の他に、日光では最古のものと推定される「導き地蔵尊」や、石の菅笠をかぶった「菅笠日限地蔵尊」など、めずらしいお地蔵さまがある。お地蔵さまは、大半が剃髪なのに、菅笠日限地蔵尊は、仏体と同質の石の菅笠をかぶっためずらしいお地蔵さまで、本堂前の地蔵堂に安置されている。東北地方では、笠作りが上手になるようにと、笠をあげる風習があるという。このお地蔵さまは、昔奉行所から命じられた開墾奉仕に出られぬ寝たきり老人に変わって勤めてくれたという話があり、困った人によって、仕事を助けてくださる地蔵尊として信仰さ